

## アントニオ猪木氏インタビュー

# 「世の中のためになるからでは なく、自分がやりたいたいからである。 それが本当のボランテイア」

98年4月4日、「アントニオ猪木」は東京ドームで38年間のレスラー生活にピリオドを打った。ドームは、過去最多7万人の観客で埋まった。その後、新団体「世界格闘技連盟」を設立、現在はロサンゼルスに居を移し活動している。



世界格闘技連盟（U.F.O.：Universal Fighting-Arts Organization）の米国オフィスは、ロサンゼルス西部にある。猪木の自宅も近い。すぐそばにサンタモニカの海があり観光の拠点として最適なため、しばしば日本の友人知人が遊びに来る。

「場所が良すぎますからね。今、何してるのかと聞かれると、無職透明で観光ガイドしてます、と答えるんですよ。」

笑顔で冗談を言う猪木は、こちらが面喰らうてしまふほど気さくだ。

アメリカへは家族と一緒に引越してきた。8才になる息子は、現地の学校に通っている。

「まったく（英語を）しゃべれないまま来ちゃったんで、登校拒否するんじゃないかと心配したんだけど。ただこの国は、何か優れている部分があると認めてくれるんですよ。（息子は）数学が結構好きですね、1年か2年上のクラスで学んでるみたいで。たまに嫌だなんて言うこともあるけど、何とか（学校に）行ってくれています。」

息子と一緒にビーチでローラーブレードをすることもある。

猪木は、「先日、久しぶりにやったらまたすっ転んでね」と大笑い。「やっと少し滑れるようになったと思っただけ、時間が空いちゃって。今じゃ、子どもの方がうまく

なっちゃった」

ロサンゼルスでは、日本ではなかなかできなかった家族とのコミュニケーションを楽しんでいる。

米国に移住したきっかけは、曰く「いい加減な理由」。メキシコからアメリカへ再入国するとき、入国審査であちこちの列に並ばされて面倒くさいなと思った。永住権があれば簡単に入国できると弁護士に頼んだところ、10日目に許可がおりてしまった。

もちろん移住の理由はそれだけではない。少し休みたいという気持ちがあったのと、海外に出たいとも前々から思っていた。「もうひとつは、世界格闘技連盟のことが頭にあった」

新日本プロレスをはじめとする格闘技団体では、多くの外国人選手をリングに上げている。契約不履行で日本に来なかつたり途中で帰ってしまう選手がいても、今までは泣き寝入りするしかなかった。こちらに本拠地を置きアメリカの法律の下で契約したいという考えは、以前から猪木の頭の中にあっ

た。世界格闘技連盟の旗揚げ戦は98年10月、東京で行われた。大会には米国を中心にオランダ、ロシアなど各国の選手が参加。この大会は基本的にノールールで行われた。「将来はルールも必要なんです

が、今はいろいろな選手が自由にリングに上げられるようにしたいんで。強いて言えば己の持っている格闘家としてのプライドがルール（例えばルールがあったとしても）どんな勝ち方をするかというのは、自分のプライドで勝負するしかないです。」

アマチュアも含め、アメリカの格闘技人口は非常に多い。「戦う場の少ないアルティメット（UFC）や軽量級の選手にも戦う場所を提供したい。隠れた人材を発掘して、彼らにスポットを当てられる場所にしたいたいというのが（U.F.O.設立の）最初の思いだった」

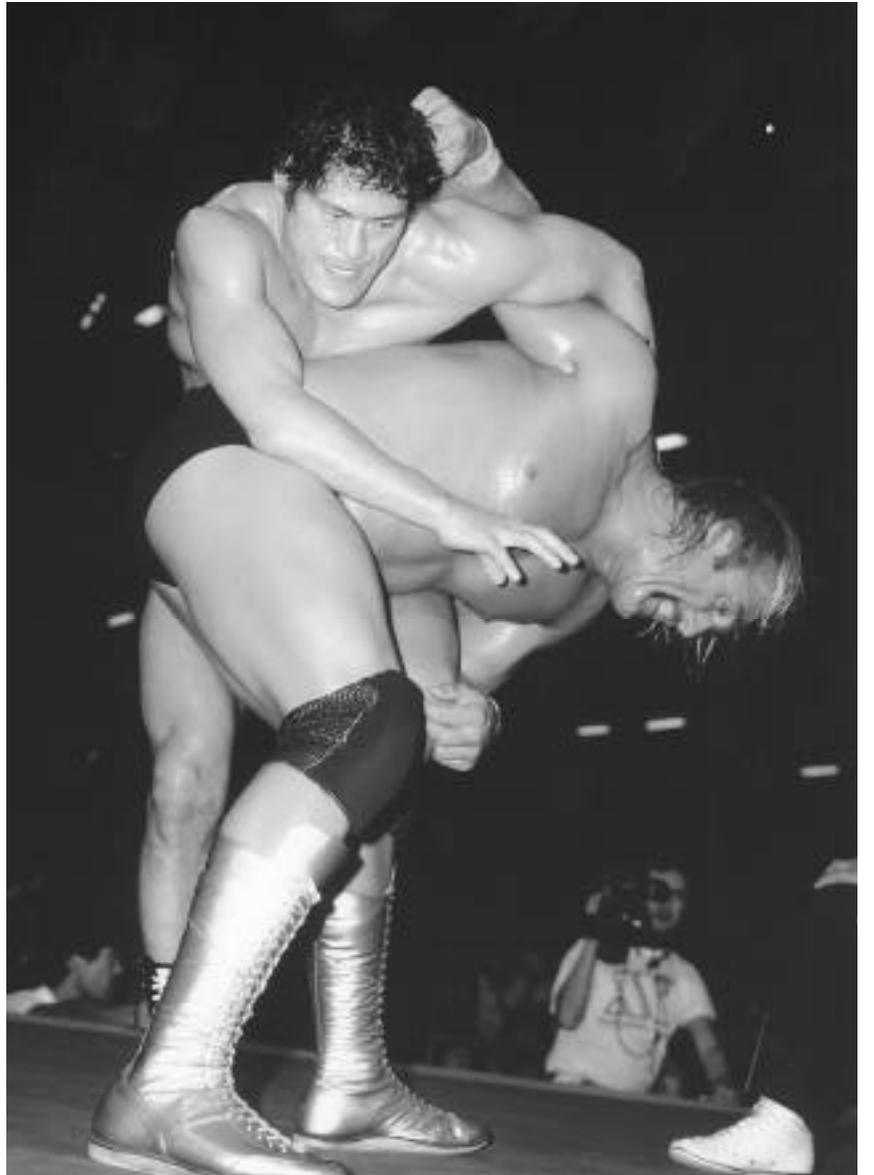
以前からロサンゼルスには何度か来ていたが、住んでみると入ってくる情報も全然違ってくる。猪木は語る。米国での仕事も自然に生まれてきた。

「本当は何もしたくないんですよ」と笑う。「そうさせてくれないのが人生というか、与えられた使命というか」

猪木といえば、モハメッド・アリとの異種格闘技戦が人々の記憶に残っている。この試合をきっかけに2人の交流は続いており、猪木の引退試合ではアリが聖火に灯をともして、大会に華を添えた。アリはU.F.O.の名誉会長でもある。

U.F.O.は、インターネットのホームページも作った。

# 「俺しかできないことって いうのかな。政治の場でも、俺にしかできないことをやってきた」



猪木は元来、メディアからではなく人とのつき合いの中から情報を得ていくタイプだ。しかしインターネットユーザーの中に「アントニオ猪木のファンがたくさんいることを知り、そういうファンにもメッセージを送ろうと、ホームページを作り始めた。自分はインターネットのことはあんまりわからないんですけどね。でも、新しいものに対する興味が旺盛なもので」

「…団体により多少ルールが異なるが、一般的に「目つぶし、金的、噛みつき」以外は何でもありの格闘技」

猪木は89年、スポーツ平和党を結成。「国会に圧固め、消費税に延随切り」という鮮烈なキャッチフレーズで見事、参院選に当選した。「政治の場に出た時にプロレスはやめるつもりでいたんですけど。実際に政治家になってみて、何を武器に活動していくか考えた時に、特に外交関係をやっていたので、(プロレスを通じて)もともと自分が持っていた世界的なチャンネルを利用していくのが有効だった。猪木は90年、湾岸危機(その後、

湾岸戦争に発展)のイラクで、ミュージシャンや新日本プロレスの選手らを集めて「イラク平和の祭典」を開催、日本人の人間性解放に繋がった。日本政府がこの計画に反対であったため、当初予定していた航空会社にフライトをキャンセルされた一行は、トルコ航空のチャーター便を使ってなんとかイラク入りした。

「パフォーマンスと言っ奴もいるけど、こんな時こそ俺たちの出番だろうと思って飛び込んでみた。情報というのは行ってみなきゃ、わからないですから。あの時は外務省を通じて日本に情報が入ってくるのが建前だったから、外務省は勝手な情報を持って来られては困るという姿勢だった。現地に行ってみると、外務省があまりに無策。ああいった国とのつき合いができていない。日本の外交がいかに遅れていることか」

「現実には人の問題なので一概に外務省とも言えないんだけど、人が育っていない。例えばイラクと交渉できる人がいたとしても(日本のシステムはそれを反映させられない。大新聞も外務省と折り合いよくやりたいから、よほどのことがない限り外務省批判を書かない)そんな中で自分はプロレスという武器を使って、いろいろ呼びかけて賛同者を連れて行った。自分にはプロレスしかないですからね」

猪木は「このこと」に「スポーツを通じた世界平和」を訴えてきた。「イラク平和の祭典」を企画した猪木に対する政界の風当たりは相当強かったが、損得勘定抜きで思ったことを行動に移してきた。ほかにもロシアや中国、北朝鮮といった、日本と通常の外交チャンネルが弱い国々でプロレス興業を行っている。

「俺しかできないことってこういうのかな。例えば政治の場でも、俺にしかできないことをやってきた。それがイラクであったり、ロシアであったり…。政治にイベントという発想は日本人の中になかなか入りにくかったんですよ」

「スポーツ紙が政治を扱うようになったのは、俺が政治に出てからだと思う。それまでスポーツ紙には、政治はスキャンダル以外ほとんど載らなかった。そういう役割というのが」

まさに猪木にしかできなかった役割どころだ。「今、政治はスポーツ紙の方がわかりやすいじゃないですか」

10年来、プロレスのリングでも講演でも、まず「元氣ですかあ?」と始めることにしている猪木は、「今の日本はとにかく元氣がない」ともどかしそうに話した。

「日本に一番必要なのが元氣。世の中全体が元氣がない。政治もそうだし…」

「こういう混乱の時代こそ(政治の世界に)型破りの人が出てきて欲しい。なんだか全部、培養されたような人ばかり。同じことしか言わないし。ちょっとは面白いことを言ってくれ、あるいは視点を変えた物言いをしてくれる人がほしいなと思うのに、誰もいないですよ」

「日本にいた時に見えなかったところが、ここからだとかよく見える。(日本で)政治評論家やいろいろな評論家がいかに日本を世界から見ているよなふりだしやべってるんだけど、それも借り言というか、独創性のない意見というか。そういうものに毎日慣らされちゃってるから、それが当たり前だと思ってるけど、(アメリカに)いると(いろいろな見方があることに)気がつくでしょう」

「国際情勢も含めて、すべての物事は裏と表で動いているのに、日本では裏の部分は伏せられちゃってる。国民に流される情報は表の情報だけで。善と悪に分ければ、善だけが人間であるといった教育しかない」「悪が正しいというのではなく、悪も存在するんだということとを認識した上で世の中を見ていかないと…。日本は培養された無菌の状態というか。そういう中で、模索どころじゃなくて何の知恵も湧いてこない。そういう風に

させられちゃったのかな」

「国会に圧固め…」というキャッチフレーズは猪木自身が考えた。「あのキャッチフレーズには、皆が大反対でね。でも俺は10人中8人が反対すると、いつも2割の方に荷担するタイプで」

「政治を馬鹿にしますよって、えらい反対を受けたんですけど。そうじゃなくて、自分の本心の思いというのがあ。形に表現していくというのが。日本人は下手ですよ。杓子定規に全部はめ込まれちゃった教育の中で生きてるから、はみ出すことができないんだよ。非常識と取られちゃうから」

「俺はプロレスのリングからモノを見ていくからね。いろんなスポーツがある中でプロレスだけは反則行為が許される。やっていいとは言わないけどね。許される。他のスポーツだと瞬時にペナルティを課せられるか、反則負けになる。プロレスというのは、カウント内なら反則も許されるというのが非常に人間的というか。そういうところから見ると政治も(違った見方ができる)。ルール自体、人間が作ったものだから(はみ出したっていいのではないか)」

「日本人の気質というのは何でも善悪に分けたがるでしょう。意志表示は玉虫色ではつきりしないのに、物事に対しては白黒はつきりつけたがる。クリントン事件なんか、絶対に許されたいですよ、日本では。でもアメリカは、それはそれ、これはこれとちゃんと分けて見ている。これは良きにつけ悪しきにつけ、いい勉強になるなあと思ってる」

「この時代には二世議員はいらないんじゃないかな。選挙制度自体が小選挙区になってしまったから、本当に思いを持った人たちが出てこない。芽を摘んでしまうような政治体制になっちゃった。日本も一部の大都市を除いてほとんどが農村部でしょう。そういう古いしきたりにとらわれた人間関係も大事なんだけど、大事にするあま

り新しい人材を認めようとしな  
ああいう(少数意見が反映されな  
い)選挙制度は、いろんな国でど  
ん撤廃されてきている訳でしょ  
逆に日本はそこへ戻ったという  
は、本当に許せないな」

「自民党の1党支配というか、  
もつとはつきり言えば竹下さんの  
支配を強力にするための政策だ  
たみたいで、その御輿を新聞社  
担いだでしょう。ある新聞社の  
長と会った時に、あれは俺たち  
間違ったよな、なんて反省みた  
なことを言っていたけど」

「日本をダメにしちゃつよね」

「アマゾンに(ライオンタマリ  
(2)という絶滅寸前の猿がいて、そ  
れを保護する(世界団体の)名譽  
長をしている。猿を保護するには  
自然が戻って来なくちゃいけない」

「人間が入ってきて伐採したりし  
て、もともとライオンタマリが  
住んでいたジャングルがどんど  
なくなっていく。最後に残ったほ  
んの一握りの生息地があいにく泥  
炭地域で、そこに火が入って9年  
間燃え続けてね。あるきつかけ  
その土地を視察して、消火活動  
を援助した。泥炭ですから自然  
発火するの、また燃えている」

「ライオンタマリ」の個体数が4  
00頭を切ると絶滅になるとい  
ことで、繁殖センターができて  
繁殖させて自然に返すんだけど、  
もとのジャングルがない訳でしょ  
繁殖させて返してもダメなんだよ  
ね」

「焼き畑で捨てられちゃった土地  
とか、牧場として使えなくなった  
土地とか。ジャングルが焼かれて  
いくのと同時に(土地が)どんど  
捨てられていく訳ですよ」

「自然を守るといふ人はいるんだ  
けど、自然を作るといふ人はあ  
まりいないんじゃないのかな。人  
がやらないことに興味を持つ方  
から(ジャングルの創生に)今  
手をかけたところなんですけど  
ね」  
「128種類のジャングルの種とい  
うのがある。椰子だとかいろんな  
木が含まれるんだけど、苗を育て

て捨てられた土地を再生させてい  
く(3)があつて、今は沖縄で実用化さ  
れてるんだけど。弟が今、堆肥か  
らアガリクスというキノコを作  
つて、まあまあうまくいきた  
みたい。(俺は)堆肥の必要性を何  
十年前前に訴えたんだけど、時期  
尚早だった。発想がいつも10年  
20年も早すぎるというか、時代  
がマッチしない」

「ブラジルの土地は表土がすぐ  
薄いんで、ジャングルを再生させ  
ていくためには堆肥がどつしても  
必要なんです。(堆肥を)苗に添  
えてやって。人間で言えば乳飲  
み子が乳離れするまで人の手を加  
えてあげないといけないんでね。3  
年くらい経つと自生能力がついて  
根を張っていきますから、勝手に  
自分で養分を取れるよつになる。  
そうするとそこに日陰ができます  
から、湿り気が出て昆虫が帰って  
くる、自然のサイクルが戻って  
くる」

「世の中のためになるからとい  
うことを前提に置かないんです  
よ。自分がやりたいからやる」「皆  
さんよく、あの人はボランティア  
をやっている、いいことをやって  
いる」という定義付けをするん  
ですけど、ポランティアってのは  
そのじゃなくて、ポランティア  
ってのはもともと本人がそれを好  
きか、喜びを感じるかでしょう?  
当然人間だから売名も入ってる  
し、でも、それをやるのが自分の  
喜びだというのが、本当のボラ  
ンティアじゃないかなと思うん  
ですよ」

老後は何をするのかと、よく聞  
かれるという猪木。「格闘ファン  
の夢を潰すようなことになつちや  
うんだけど、それ(格闘技関係)も  
与えられた仕事だからやるだけ  
で、自分の心の奥にまた違った  
自分がいるじゃない。自分に忠  
実に生きるとすれば、元氣なう  
ちにジャングルの創生をやりたい  
な」と、今までは借金地獄に追  
われてましたから、やっと解放  
されたんで」  
「環境保護とかいう最近の言葉  
になつちやうと、どうも...。そ  
れには違いないんだけど、やつ  
てる歴史が違つたんだよね。自  
分がブラジルに移民として渡  
つてこーヒー園で働いて、そ  
ういうところから自分の今の  
発想がスタートしてるんですよ」

史が違つたんだよね。自分がブラ  
ジルに移民として渡つてこー  
ヒー園で働いて、そういうところ  
から自分の今の発想がスタート  
してるんですよ」

\*2 国際自然保護連合刊行の96年版「生存  
を脅かされている動物のレッドリスト」で、  
近絶滅種(近い将来に高い確率で野生では絶  
滅に至る危機にある種)にリストアップされて  
いる。全身が黄金色の毛で覆われたゴール  
デンライオンタマリは、熱帯林保護のシン  
ボルになっている。

\*3 猪木は80年、ブラジルにハイテクノ  
ジのベンチャービジネス、アントン・ハイ  
セルを設立。当時ブラジルでは、サトウ  
キビからアルコールを精製した後のバカ  
スという絞りカスが公害問題となつて  
いた。アントン・ハイセルは、バカ  
スを発酵させて家畜飼料とし、その  
家畜の糞を有機肥料にするという夢  
のリサイクルを目指した。残念ながら  
日本とブラジルの気候の違いから  
酵母が発酵せず失敗。以来マス  
コミに「ことあることには猪木  
=借金」と書き立てられること  
になる。

「引退に対しては、(現役である  
ことに)そんなに執着なかつたか  
ら。政治の場に出た時に決心は  
できてましたから。ただひとつの  
イベントとしてね、儀式といつか、  
それが東京ドームだった」  
「いつもいつも、スキヤンダル  
との戦いだったでしょ。それと、  
プロレス八百長論に始まる偏見  
との戦い。今でこそプロレスは認  
知されたというか。今回はレス  
ラー(ジェシー・ベンチュラ)が  
ミネソタの州知事になったし」

「レスラーっていうのは、こと  
あることに偏見で見られてきた。  
それを支持するファンも悔しい  
思いをしてきた。一般紙はプロ  
レスは載せないとか。ルス力戦  
(4)の時に朝日新聞がやつと載  
せたけど。そういう戦いの歴史  
だから。ひとつの幕引きとして、  
(引退の瞬間は)お客さんに対  
してじゃなくて、社会に対して  
ざまあみろというのがある  
ましたね」

\*4 柔道のミュンヘン五輪金メダリスト、  
ウイリム・ルスカと猪木が、アリ  
戦の4ヵ月前に行つた初の異種格闘技戦  
91年、猪木は約200名の参加  
者とともに中国に渡つた。シルク

ロードを約2000キロ、全員が  
オートバイで走り抜け、途中の  
町や村の人々と民間交流を行  
つ、まさに型破りの外交だ」

「子ども頃にスクーターに乗  
つたけど、オートバイはあの時  
初めてで。結構興奮しましたよ」  
「現地でちよつと練習したん  
だけ、転ぶんだよね。俺も楽し  
かつたんだけど、参加した人  
たちも生涯忘れられないよ  
う。自分も楽しつて(参加者  
には)喜んでもらえて。今また、  
(そういう計画も)いろいろ考  
えているんですよ」

「日本に帰るとお客さんが分  
刻みで連なっている。ここに  
いると誰にも干渉されないん  
でね、ぼけつとしての時間、  
瞑想する時間、そんな中で  
自分らしさというか、自分  
らしい人生を送ればいいな」  
UFOの第2戦は、12月30日  
に大阪で行われた。「認知さ  
れるまでが物凄く大変なん  
ですよ。今その戦いをやって  
いる最中だから。あと半年か  
そこらでUFOも決着が着  
きますんでね、その間に選  
手だけでなく、経営の(人)が  
育つてくれれば、そうしたら  
自分のためにもつと時間を  
割けますから」

猪木が折にふれて使ってきた  
言葉がある。「この道を行  
けばどうなるのか/危ぶむな  
かれ/危ぶめば道はなし/踏  
み出せば、その一足が道とな  
り/その一足が道となる/迷  
わず行けよ/行けばわかる  
さ」。猪木の周りにはいつも  
逆風が吹き荒れていた。しか  
し、己の信じる道を迷わず  
進んできた人生は、多くの  
ファンを魅了し勇気づけて  
きた。

猪木は引退セレモニーの中  
で「人は歩みを止めた時に、  
そして挑戦を諦めた時に、  
年老いていくのだと思  
います」と語つた。UFO  
が落ち着いたらまたアマ  
ゾンに行きたいと、少年  
のように目を輝かせる猪  
木。人生というリングで  
挑戦を続ける猪木は、私  
たちの心をいつまでも  
ときめかせてくれる。

### アントニオ猪木の軌跡

本名:	猪木寛至
1943年:	神奈川県横浜市に生まれる
1957年:	ブラジルに移住
1959年:	陸上競技のブラジル全国大会で円盤投げと砲丸投げで優勝
1960年:	力道山にスカウトされ帰国、プロレスラーとしてデビュー
1972年:	新日本プロレス設立
1976年:	プロボクシング世界王者モハメッド・アリと対戦
1989年:	スポーツ平和党を結成、参院選に当選。史上初の国会議員レスラーとなる モスクワで初のプロレス興業
1990年:	中国でプロレス興業 湾岸危機のイラクで「平和の祭典」を開催。日本人人質全員解放に繋がる
1991年:	キューバのカストロ首相と会見
1995年:	北朝鮮で「平和のための平壤国際スポーツ文化祝典」を開催。史上空前の38万人を動員
1998年:	東京ドームで引退試合。ドーム最多の7万人を動員 ロサンゼルスに移住 世界格闘技連盟を旗揚げ

